

DI ニュース

2023年6月

スルホンアミド類似構造を有する薬剤のアレルギーについて

薬剤アレルギーは薬剤によって引き起こされる過敏反応で、薬剤本来の作用とは関係なく一部の人に起こります。スルホンアミド系抗菌薬は、薬剤アレルギーを引き起こす原因薬剤の一つであり、抗生剤の中ではペニシリン系に次いで多いという報告があります¹⁾。

スルホンアミド類似構造は非常に多くの薬剤の化学構造で基本骨格あるいは置換基として利用されている部分構造(図1)である。スルホンアミド類似構造を有する薬剤は、バクタ®配合錠の有効成分スルファメトキサゾールに代表されるスルホンアミド系抗菌薬とそれ以外の薬効の非抗菌性スルホンアミドに分けられる。

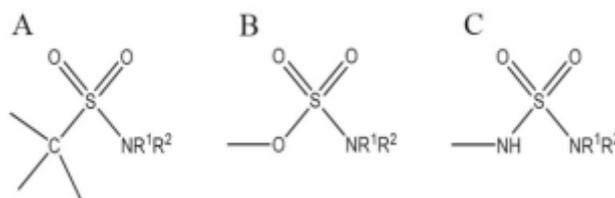


図1 スルホンアミド類似構造

(A: スルホンアミド構造、B: スルファマート構造、C: スルファミド構造)

スルファメトキサゾールは、N4 部位にアリアルアミンが含まれ、N1 部位に5員または6員の窒素含有環が含まれており(図2)、このN1 部位及びN4 部位の置換基が免疫学的反応に関与しアレルギーが発症すると考えられている²⁾。

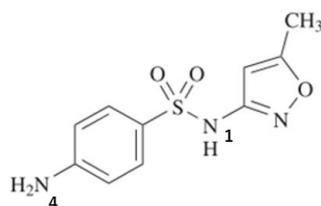


図2 スルファメトキサゾール構造式

スルファメトキサゾールと同じ条件の構造式を満たす医薬品は、サラゾスルファピリジン(当院採用薬サラゾピリン®、アザルフィジン®)、スルファジアジン銀(当院採用薬ゲーベン®クリーム)などで、これらはスルホンアミド系薬剤に対し過敏症の既往歴のある患者には禁忌とされている。その他の非抗菌性スルホンアミドは、スルホンアミド類似構造を含有するものの、それぞれの有する置換基やその化学構造中の存在位置はさまざまである。

スルホンアミド系抗菌薬に過敏症のある患者に対する非抗菌性スルホンアミドの交差反応性が検討された結果は否定的であったという報告がある³⁾。しかし、その逆または非抗菌性スルホンアミド同士の交差反応性は検討されておらずほとんど明らかにされていない³⁾。

添付文書上でのスルホンアミド類似構造由来の薬物過敏症に対する注意喚起の記載は、「禁忌」や「特定の背景を有する患者に関する注意」の項目などにあり、統一されていません。そのため、薬剤アレルギーについては、薬剤ごとに情報収集することが必要と考えられます。

参考文献

- 1) Collin E. Lee, RPh; Teresa R. Zembower, MD; Michael A. Fotis, RPh; et al. The Incidence of Antimicrobial Allergies in Hospitalized Patients Implications Regarding Prescribing Patterns and Emerging Bacterial Resistance. *Arch Intern Med.* 2000; 160: 2819-2822
- 2) Amber Giles, Jaime Foushee, Evan Lantz, Giuseppe Gumina. Sulfonamide Allergies. *Pharmacy (Basel)*. 2019 Sep; 7(3): 132. Published online 2019 Sep 11.
- 3) 田中博之、篠原悦子、佐藤光利、石井敏浩：スルホンアミド類似構造を有する医薬品の薬物過敏症に関する添付文書の調査研究, *Jpn. J. Drug inform.*, 18(1): 1~6(2016)
- 4) 各種医薬品添付文書